



何事もなく私が任務を終えたと、医師の出家者が私に一袋のブドウ糖を点滴しました。尊師からのインシエーションです。そのインシエーションには、風邪薬を服用したときのようさしびれを身体に感したため、薬品が含まれていたのでした。

菌の培養のほかに、今頃、指示された仕事は次々と私の意識にのぼってききました。衆院選後、教団は本支部を閉鎖し、出家者は交代で、富士山総本部道場における五日間の極厳修行に入れられていました。このころがCSIのメンバーは修行に入れられず、至急の仕事と命とをわけていたのです。

私は麻原から、教団が製作する気球の上昇高度の計算と指示されました。また村井からは、工業用のフィルムタリの調査と購入と指示されました。菌と大規模に培養し、今の菌から何らかの生産物を得るために使用する。

そのほかの指示も重なり、あわただしく日々が過ぎるうちに、教団にも動きがありました。麻原が出家者に対して、四月二四日に石垣島にてインシエーションを与えること発表したので、また現地にしばらく滞在し、修行するところも、今して本支部所属の出家者は麻原の厳命により、持参場に戻り、このセミナーへの参加と在家信徒に必死に呼びかけている状況でした。

この一連の出来事が示す解は、一点に収束しました。上九でつくって、いりものや地球に載せ、世界中に撒くのは、下は、下すか、そうするところ、撒かれたころに、いり生物は、生命の危機に瀕します。今度の石垣島でのセミナーでは、インシエーションと、今、今の菌に対する抗体が与えられ、下は、いりです。

現実離れした回答が唐突に与えられたことについて、奇異に思われ、かもしれません。しかし今頃、オウムというコミニティーで、閉鎖的環境において、アラヤリナウの救済が説かれ、続けたために、教団では規範意識が一般社会の今頃は乖離し、その救済に人々の生命を絶つ「ポア」するところ、一の実行は当然のこととして受け取られていたのです。

果たして麻原は、  
「今の分かつていたのか」  
「感慨深げに志すました」  
「今して再び私に伺いました」  
「表面的なことはすべて分かつていりようだが、深い意味はどうか」  
「現代人は悪業を積んでいり、カルマ落としとすうのですか」  
私の回答に触れることなく、麻原は説き始めました。

現代人が悪業を積んでいり、地球が三悪趣化し、宇宙の秩序が乱れていり、それを我々が正さなければいり、これが上九で培養するものは、ボツリ又ス菌である。この菌が生産するボツリ又ス、トキシンは、少量でも吸い込むと呼吸

一九九〇年二月一八日の衆院選に、麻原が教団関係者二五人が出席し、全員が落選。教団の宗教法人格の取得が妨害されたことにより、救済活動には政治力が必



この話し合ひの中、麻原氏は呼んだ三〇名ほどの弟子の中から、瀨氏を指名し「何とどんな目的で作つてゐるか分るか」といふ趣旨の質問をいたしました。それに對して、瀨氏は「おれはよく、毒性のある細菌を作つて、世界中に散布しよう」と答えてゐるんだと思ひます。その内容も過不足なく、あつさり静かに答えてゐた様子をよく覚えてゐます。

同席者の多くは、全員ではなからいけれども、今もいせんが、私と同様の心理状態だつたのではなからいでしょうか。今、後の作業の状況から察します。

ここで麻原は、ホツリヌス・トキシンを世界中に散布することをよつて、アピラケツノミコトになれ——シヤンバラの実現のためには戦え——との啓示を行動に移すうの意思したといえらう。残すべき者と残せざるを我々がやるんだ。そして、縁ある者と地球に転生させて、真理の實踐もさせる。その言葉から、真理と實踐する者のみに住まう理想国家、つまりシヤンバラの建設を意圖してゐたことがうかがへる。自身のアピラケツノミコトであることも、觀みの上で、今の人間よりも靈性のすつと高い種、これを残すことがわたしの役割なのかも知れない。軌を一にする考えを述べてゐるか。上に実現しようとしたのです。

この「アジラヤ」の救済を麻原が行動に移した結果は伴ひません。アジラヤの契機は、自ら述べてゐるように、衆院選での落選と考へて矛盾はありません。その蹉跌によつて麻原は、現代人は救済が難いとの認識をより深め、かかる衆生を救済する手段といわれる「アジラヤ」へと舵を切つたのでしよう。それが「マハヤ」ナでは救済できないこととが分つた。これからは「アジラヤ」ナでいくという言葉の意味です。本質的には前述のように「アジラヤ」の救済の野望が臨界近くまで達してゐた麻原に、衆院選での惨敗という刺激が加わつたに過ぎないのかもいせんが、それは額面どおりに受け取れない部分があります。これはむしろ、落選する結果になる衆院選に出馬したことの正当化でしょう。

また麻原は衆院選について、落選を最初から承知の上で散えてテ、ストリたという状況ではなく、落選を目標して真剣に取組んでゐた。これは一九八九年一月から翌年一月頃、麻原は私に電話で、これは当選するかどうかの心配してゐるようが、いんばと漏らしたり、今に見てらよと話したりしてゐたのです。

一方ウアジラヤーナの救済の實行については、衆院選出馬の前か  
ら一貫して麻原の念頭にあつた可能性は否定できません。事実、麻  
原は一九八九年七月に衆院選出馬と出家者に発表した後も、ウアジ  
ラヤーナの救済を説き続けていました。特に同年九月二四日には東  
京本部道場（世田谷）において、当時として例外的に、在家信徒  
にまでボアを説いたほどです。麻原は政界進出を目指し  
つつ、ウアジラヤーナの救済を意思していたのかも知れません。

麻原は説法を終えらると、私どもの一人一人に任務を与えました。  
上九にプレハブ棟を建設し、その中にボツリヌス・トキシニン生産プ  
ラントを製作するのはCBIの担当。プラントの設計とプラント  
の制御盤（AM放送局程度の出力の送信機（電話等が不通になるこ  
とを想定しての通信用））気球の各製作は主にCSI。ボツリヌス  
菌の大量培養のための種菌の準備は主にCMI（教団の医学班）。  
ボツリヌス・トキシシンの各生産工程、すなわち菌の大量培養（容量  
10m<sup>3</sup>の培養槽×四基）、トキシシンと菌との分離、トキシシンの乾燥、  
粉末化に関係する作業は主に大塚。私は菌の大量培養の責任者を命  
じられました。

また麻原は、このメンバーは、石垣島へは行かないと明かし  
ました。石垣島でのセミナーは、教団関係者の避難が目的だとの  
です。ボツリヌス・トキシシンを搭載した気球は偏西風に乘せて拡散  
する予定でしたが、石垣島は偏西風の経路から外れていくわけです。  
この計画の従事者は、セミナーが開催されていく頃に気球を放つた  
後、富士山総本部道場に用意された気密室に避難する段取りでした。  
4-1-5

この会合の最後に、麻原は私どもに「直ちに作業にかかれ」と指  
示しました。午の号令に従い、私どもは時を移さずに任務に就いた  
のです。普段と変わりなく。

密教の戒による、麻原の説いたウアジラヤーナ救済の類々教えは、これを同  
（資格のない者）聞くことが教えと誤解する可能性のある者）に対して説くこ  
とが、説いた者は無間地獄（最も苦しい地獄）に墮ちるとされる。今までの麻原は、  
この教えを在家信徒に説くにあたり、（多少は）慎重な姿勢を見せていた。  
\*2 麻原が大師と作業員として選んだ理由は、この計画は宗教的行為であり、宗教的  
に高スティージな者が従事すべきこと、利断したほうが好都合。  
大師、スティージに達している者は、所属がCBI・CSIなどであり、技術者  
として必要とされた。

\*3 実際は、作業現場の安全対策は杜撰であり、ボツリヌス菌の培養に成功していた  
ら、私どもが真先に死んでいただろう。点滴も作業に携わる頃には効果は消失  
するにすぎなかった。